



獣の数字とその刻印

ジェームス・アラビート
James Arrabito

書籍版

6 6 6

— 獣の数字とその刻印 —

Part I

再臨前の大きな欺瞞

イエスはまもなく来られます。そしてその前に、キリスト教会に大きな欺瞞が起こるでしょう。パウロは彼の時代に起こった欺瞞を、コリント人への第二の手紙 11 章の 13 節から 15 節の中に描いています。「偽



の使徒が現れても、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。だから、たといサタンの手下どもが、義の奉仕者のように擬装したとしても、不思議ではない。彼らの最期は、そのしわざに合ったものとなろう」。私たちにとっては、いつの時代でも指導者等が、教会に偽の教理を持ち込んで来たと考えるのは困難なことです。

知っておくべき重要なこと

しかし、イエスが来られる直前、現実には二つのクリスチャングループが形成されることでしょう。一つはイエスを待望していて、彼が栄光の雲に乗って来られる時、準備が出来ているグループです。黙示録 14 章 12 節に彼らのことが描かれています。「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰、すなわち、イエスの信仰を持ちつづける聖徒

の忍耐がある」。もう一つのグループは、神が地上に来られる時、失われる人達です。黙示録 14 章 9 節と 10 節に「他の第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、『おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊の前で、火と硫黄とで苦しめられる。』」とあります。獣とは何者なのか？またその数字とは何かを知ることは、極めて重要です。しかし、私たちは、どうやって獣とその数字の正体を知るのでしょう。

獣とその数字「666」



この世界は悪の勢力の奴隷と なっています。その勢力は、人類が造られた時から存在しています。この勢力は全世界の人間を滅ぼそうとしています。神はそのことを黙示録 13 章 18 節で明らかにしておられます。「ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である」。

世の最初の権力者ニムロデ

「666」とは獣と人の数字です。これがこの勢力の正体を明らかにしているのです。まず、シナルの平野で起こっ



た最初の文明、すなわち、メソポ
タミア文明を振り返ります。遊牧
民たちは、あの肥沃な地に定着す
るようになりました。彼らは危険
な猛獣に遭遇することがありまし
た。安全の為、猛獣たちをその土
地から、一掃することが是非とも

必要でした。その仕事を率いたのが、ニムロデという人物
でした。このニムロデは、世の権力者となった最初の人で
ありました。ペルガモン博物館にあるこの像は、ギルガメッ
シュの名の下にあった古代の英雄を描いています。ニムロ
デは素手で、雄牛を殺したと言われていています。巨人たちの
時代であっても、これは離れ
技でした。彼は素手で、ライ
オンを殺したとも言われ、こ
れらの偉業が、彼の権威と支
配権の象徴となったのでし
た。



キリストの時代から 3000
年も前にあった「円筒印章」
は、この英雄とその狩猟の腕
前を誇示しています。彼はま
た民族の神となり、強制的に
自らを拝ませました。彼は自ら



の支配権の象徴として、ライオンのマントを身に付けてい
ました。また、最初の冠として、雄牛の角を頭に被りました。
やがてシナルというバビロンの地域には、様々な小国に分



離し、それぞれに王が君臨するようになりました。これらの王たちは、ライオンを殺すという伝統を維持しました。ニムロデは最初の大都市を建設しました。彼は、塔や橋や様々な建物を建設する人物としても有名でした。

中でも最も有名なのは、彼が巨大な塔を建てさせた話です。この塔は占星術の神々、中でも特に、太陽神に捧げられたものでした。それは宇宙の創造主であられる神への反逆でした。

古代バビロン宗教の発端



ニムロデには美しい妻がいました。その女は金髪で、青い目をしていて、王国中の人々を魅了しました。最初の血の生贄と魔術の儀式を始めたのは、彼女でありました。ニムロ

デの死後、自らを女神としたセミラミスは、その夫同様、彼女を拝むよう民衆を仕向けました。彼女を失脚させようと企む者から、自分自身を守るために、彼女は神秘宗教を興しました。彼女は全女性の母、また聖母崇拜の元祖となったのでした。セミラミスの時代以来ずっと、世界中に様々な神話や伝説が引き継がれ、彼女は様々な名で崇拜されてきました。セミラミスには、美しい息子がいました。不倫

の子でした。それが全ての淫らな性的関係の元祖となり、セミラミスは、太陽神となったニムロデのパワーが彼女に入り、彼女は処女のまま身籠ったのだと、民衆に説いたのです。これはニムロデの生まれ変わりに違いないと信じ込んだ人々は、その子供を拝みました。その子が青年になった頃、彼は野生のイノシシに殺されてしまいました。以来、イノシシは神々の破壊者の象徴となりました。こうして民衆は失われた救世主の為に、嘆き悲しんだのです。セミラミスはその救世主と太陽を拝むよう民衆に教えました。彼女の子供は3日の内に蘇って、天に昇ったのだと主張しました。



古代バビロン宗教の^{しんずい}真髓



確かに古代バビロンの天体の神々は、元々彼らの他界した王や英雄たちの靈魂であると考えられていました。そこからこの地に占星術なるものが生まれました。星が祭司らの信仰の対象となりました。彼らは天の動きを観察、研究しました。彼らは地上で起こった様々な事件に合わせて星座を作成し、こうして自



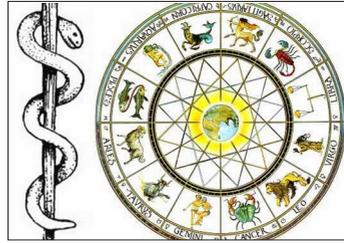
分たちは、これら天の支配者たちが、地上の生活に及ぼす影響を占うことが出来ると考えました。選出された祭司だけが、秘密の知識を持つことが出来ると考えられました。しかし、星や太陽や月を拝んでいながら、実際には死者の靈魂を拝んでいました。つまり、バビロンの宗教は、死人崇拜であったのです。

占星術に見る「666」



太陽は無論、最高位の神でした。天空での太陽の動きは、注意深く研究されました。太陽がある一定の道を辿るのを、彼らは発見し、その道を「黄道帯 (ZODIAC)」と呼びました。昼間の太陽を良い神様とし、夜の闇を悪い神様と考えました。天地を支配する神々にまつわる話が、たくさんの神話と多くの奇妙な生き物を生み出したのでした。「6」という数字が、人間が生まれたか、あるいは創造された日を表わし、蛇が造られた日と考えられていました。こうして「6」は、男と女と蛇を象徴する数字となったのでした。昼間「黄道帯」を通過する太陽に6つの宮(きゅう)が与えられ、夜にもまた6つの宮が与えられました。各宮の中で、太陽は3つの部屋を通過しました。これが「黄道帯」の中で、36部屋を構成し、古代人は太陽が与える36の啓示と考えたのでした。「黄道帯」には36の神々がいて、それぞれがそれぞれの部屋に

住み、天空の36星座を支配していました。1から36までの数字を足してゆくと、その合計は、「666」という隠された神秘の神を表わす数字になります。これらの迷信的な神秘主義者たちは、「666」



という数字を太陽に捧げました。蛇のパワーが太陽に潜み、自然の中の力を彼らは拝み、7つの頭を持つ龍としました。それぞれの頭は、惑星の神々である太陽、月、火星、水星、木星、金星、土星を表わしていました。このエネルギーは太陽から流れ出て、ありとあらゆる自然を潤していると考えられ、魔術に通じている者達は、精神の修行とまじない、そして魔法の数字によって、これらを操ることが出来ると考えられていたのです。

拡散した古代バビロン宗教

バベルの塔に於いて、神がこの制度を、言葉を乱すことによって破壊なさった時、異なる言語を話す祭司たちが、民衆と共に世界中に散って行きました。この離散の結果、各時代にわたり、世界中いたるところで、バビロンの神秘宗教が祭司らによって、教えられることになったのです。この古代の占星術と太陽に捧げられた宗教の生





き残りが、世界のあちこちで、巨大な塔やピラミッドに見られます。

再び地の権力を握ったバビロン

ニムロデの後数世紀にわたり、バビロンは様々な王の支配下がありました。ところが、キリストが生まれる600年ほど前に、バビロン人たちは立ち上がって、アッシリアの支配者を倒したのです。今やバビロンは再び他の国々を支配するようになりました。ネブカデネザルとその父親が、他の国々を次々に制覇して行きました。他国の王たちを捕えて、宦官（去勢された召使い）にしました。王子たちもネブカデネザルの召使いにされました。彼はまた、バビロンに於いて、「ジグラット」という巨大な神殿を完成させました。この「ジグラット神殿」の模型が、サンノゼッシュの博物館に展示されています。塔の基礎部分は、土星サトゥルヌスを象徴していました。その上が木星ジュピターで、その上が火星マルス、その上が太陽、その上が金星ビーナス、その上が水星マーキュリー、そして月と続きました。このように塔は「黄道帯」を通過する7つの占星術の神々を表わしていたのです。



バビロンの宮や、様々な場所には、金メッキがなされていました。バビロンは黄金の都として知られていました。



都の通りでは太陽の祭り、すなわち、古代バビロンから伝えられたカルトが再び崇められ、ニムロデとその妻は別の名で崇められていました。セミラミスは、イシュタールと呼ばれるようになり、その息子はタムズと呼ば

れました。バビロンに通ずる主要な入り口は、イシュタール門と呼ばれ、月の女神に捧げられていました。それは女性を象徴する青い色をしていました。門には神々のシンボルが置かれていました。バビロンから約 5000 もの神々が生まれ、祭司たちが民を迷信でがんじがらめにするのに用いられました。宮殿とその周囲には、体の一部が雄牛と鷲、人間そしてライオンで出来ている巨大な守り神が置かれていました。



バビロンに見る「666」



英国博物館に置かれているこの神は「ウンドウカ」と言って太陽を表わしています。バビロンの神々の中で最も崇められた神のひとつに、シュロの木がありました。生命の生まれ変わりを象徴していました。バビロンの「666」の神は、「マルドゥク」という名の像と

して表わされていました。聖櫃に「マルドゥク」を入れて、川に流しているこれらの祭司たちは、バビロニアの宗教で最高位にある大祭司を育てるクァンタス大学からのものです。その大祭司がポンティスマキシムスという王様でした。彼は神として国を治めました。当時の世界を治めました。彼の言葉が法律となりました。



彼の数字もまた「666」であったのです。彼の直属にバビロンの神秘主義の祭司や、魔術師らがいました。こういった人々が全ての教育機関と経済、そして経営を牛耳っていました。彼らが当時世界中の師として君臨していたのでした。



民衆は彼らを崇め、あたかも神々のように拝んでいました。巨大な城壁の砦を築き、事実上、国際的連結を固めていた自分たちが、その権力を失うことになろうとは、全く考えられないことでした。

一夜にして滅びたバビロン

ところが、東方の山間部で、ペルシャの軍隊が破竹の勢いで強力になっていました。彼らにもまた、メソポタミアの古代宗教に源を





置く独自の祭司制度があり、神々がいました。ペルシャの兵士たちが、バビロンの門の下に流れる川から侵入した時、都の入り口の門が開けっ放しになっていたというのは、全く摂理としか言いようがありません。こうしてバビロンの都は一夜にして敵の手に落ちてしまったのでした。ペルシャ人もバビロンの神々と非常に似た神々を持ち込んできました。大体この頃までに、ヘブルの宗教は全世界に広まっていた。

各地で作り上げられる類似の神々

ゾロアスターという男が、ヘブルの預言者らに対抗をするため、ある宗教を考え出しました。彼は光と闇の間の神を作り上げました。人々はその神を日曜日に拝みました。世界中いたるところで、神々が作り上げられ、同じよう

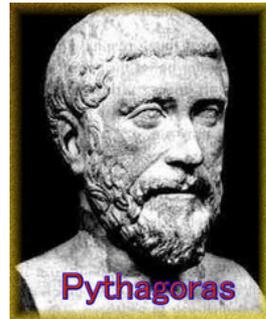
な形態の宗教を反映しました。自然の神、作物の神、川の神、繁殖の神が、次々と作り上げられました。これら全ての神々は、その裏に、秘密の寓話的意味を持っていて、それを知っていたのは、イニシエーション（ある階級に属するための一定の儀式）を受けた者だ





けでした。エジプトに於けるこれらの秘密の教えは、数々の異なるカルトの影響を受けました。フォースのカルト、またはイシスのカルト、ヘルメスのカルトとかいったのがそれです。

ヘルメスは全てのカルトの内でも最もよく知られるものとなりました。一時ヘルメスは人間であったと考えられていました。真理の知識を探求し、彼は天空を治める大いなる龍から、教えを受けたと言われていいます。ヘルメスは42冊もの神秘主義に関する書物を表わし、それらは、ヘルメテックミステリーと呼ばれました。これらの書物は、エジプトのアレキサンドリアにあった大図書館に保管されていました。プラトンやソクラテス、ピタゴラスといった偉大な哲学者たちは、近代教育体制の生みの親となりましたが、彼らはヘルメスの神秘へのイニシエーションを受けていました。



バビロンの魔術師や祭司たちは自分たちの支配力が挫かれたことを悟り、その権力を再び取り戻す為、自ら運動を起こそうと決めました。彼らはバビロンを逃れ、神聖な像も一緒に持ち出しました。彼らは小アジアの新しく急成長を遂げた帝国へ行ったのでした。ペルガモンの国に於いて、彼らはペルガモンのアクロポリスと呼ばれる巨大都市を築きました。ここで彼らは、それぞれの偉大な神々を祀る神



殿を建立しました。中でも最も重要なものは、ゼウスの神を祀った神殿でした。この神殿の前方の模型が、東ベルリンのペルガモン博物館にあります。その建物の表には、ギリシャの神々の戦いが、描かれています。祭司た

ちは神殿の中に、巨大な蛇を置きました。アスキュラピウスと呼ばれるこの大蛇は、麻薬や催眠術、また魔術で人を虜にする薬物または魔術の神でした。これらの神殿で彼らは、学生たちに魔術的癒しの儀式を執り行う方法を伝授しました。バビロニアの祭司らは自分たちの神々を拝み続けました。そして紀元前 168 年に、ローマが世界制覇を成し遂げた頃、ローマに



侵入してそこから世界の支配権を奪い返すというのが、彼らの計画でした。紀元前 133 年に、ペルガモン最後の王が、ペルガモンすなわちカルデア人の祭司制をローマに譲り渡し、彼らはローマにその神々と祭壇の石を持ち込んだのでした。彼らの

神、サルトゥヌスはカルデアの象形文字表記法で数字を足してゆくと、「666」になります。



ローマに於いてもこれらの祭司たちは、その数字をずっと身に着けてきました。これらの魔よけの写真は、1910年にベルリンで撮られたものです。これらの魔よけの全面には、1～36までの数字が散りばめられています。黄道帯の36神です。各列の数字を足すと、どれも「111」になります。これらを全て足してみると「666」。隠された神秘の神の数字です。バビロンの宗教があまりにも普及し、一般化してしまったので、ローマは新バビロンと呼ばれるようになりました。ギボンズ枢機卿の著書、「父祖たちの信仰」に、「今ではバビロニアの祭司らの地へ、すなわち、太陽のカルトはローマから再び世界を支配した」と書かれているほどです。

世界の闇に現れた光



歴史の中で世界がこのように闇に覆われている時、イエス・キリストはこの世においてになりました。キリストを通して神は、御自らの霊を心に伝えられました。サタンの勢力は打ち碎かれることになり、その働きにはむかう恐るべき場面へと、キリストが向

かわれるのを私たちは見たのでした。初代教会の先駆者のひとりである、テルトリアンは殉教者たちの血が見られると宣言しました。人々が死んで



逝った結果、さらに多くの信仰の改宗者が生まれたのでした。神はヘブルの人々に、神を捨てた国の習わしに従って歩むべきでないと警告されました。彼らは神が忌み嫌われることを行ったのでした。ところが使徒パウロによると、オカルト界の背教そのものが教会にやって来ると言われています。「わたしが去った後、凶暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んで、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている」（使徒行伝 20:29）。テサロニケ人への第二の手紙 2 章の 3 節 4 節で、キリストが来られる直前に教会で起こるであろうことをパウロは預言しています。「だれがどんな事をして、それにだまされてはならない。まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反抗して立ち上がり、自ら神の宮に坐して、自分は神だと宣言する」。

キリスト教に入り込んだ不法の者

新約聖書でパウロが「宮」という言葉を使う時、彼はキリスト教会の事を言っています。キリスト教会に於いて人間を神より高める勢力が興ると、このような組織的背教がどのようにして教会に入り込むと言うのでしょうか。使徒た

ちの時代、サマリアに於いてシモンマグスという人物が登場します。彼がキリスト教に改宗することはありませんでした。彼はオカルト宗教の達人、またヘルメスの神秘主義の継承者で、街全体を支配していました。彼はローマに向かい、そこで人々から神と信じられました。ところが彼は民衆に自分はイエス・キリストであると説いていたのです。その地で彼を祀る巨大な宮が建てられました。彼は分けられた蛇を意味するバチカンという場所に礼拝本部を設立しました。シモンマグスは死去した後、ローマにあるそのバチカンの丘に埋葬されました。この背教したキリスト教運動から分離していった他の人々は、自分たちのカルトを設立しました。この大運動に加わった人々はグノーシス派と呼ばれ、オカルト界をリードするあるグループは、クリスチャンと名乗りながら、占星術から来た異教の神々を反映する紋章を持っていたのでした。



1945年、エジプトの高地にあるナグハマディーという小さな町で、洞窟の中からたくさんの書物が発見されました。これらは神聖な書物で、多くの使徒の名が示されているようでした。しかし、本当に誰がこれらの書物を書いたのでしょうか。使徒たちが決して説かなかったオカルトの教えや心霊術の教えがキリスト教福音の中に織り込まれていて、あたかもそれらが本当に神の靈感を受けているかのようにふれ込んでいることが、研究により明らかになりました。このグノーシス運動、すなわち、キリスト教運動の偽

物は、使徒たちから受け継いだ多くの根本的な教理を低下させ、破壊する結果となりました。

中でも著名なのは、人が自分たちの知的哲学的見解に合うよう聖句を寓話化し、神話化したことでした。これらの人々は人間の心の期待部分、あるいは人間の霊魂だけが贖罪可能であると考えました。これは純粋な異教の贖いに関する原則です。彼らは終末論の概念、あるいはキリストの来臨へと導く預言を不要なものとし、実存主義と経験に重きを置きました。悟りの声や恍惚説法や異言といった異教の概念を教会に持ち込んだのはこういった人々でした。彼らは人が律法に服従するのは不可能である故に、旧約の律法は悪法であり、破壊されねばならないと主張して、服従という概念を弱めたのでした。こうして彼らはキリスト教会に、反律法主義、道徳律不要論を生み出しました。神の奇跡が何か特別なものであるとは、彼らは信じませんでした。誰でも奇跡を行うことが出来ると、彼らは説いたのでした。彼らは堕落した悪天使の概念を弱めました。神学は哲学の体系となり、聖書の重要な言葉は、ただ霊的に解釈され片づけられました。運動の中心的教理とは、受肉なさらなかったイエス・キリストでした。唯一の純粋の光は神であるから、イエスは単に光であった。そして肉体を有する者は何であれそれだけで悪であると彼らは主張しました。従って悪である人間が律法に服従することは出来ず、人はただ光を知るだけで救われるのだと。



イエスは我々のとは異なった肉体を持っておられたというグノーシス派的誤りが全キリスト教会の様相を変えてしまったのです。ヨハネはそれを反キリストの精神と呼びました。ヨハネ第一の手紙4章の2節3節にはこう書かれています。「あなたがたは、こうして神の霊を知るのである。すなわち、イエス・キリストが肉体をとってこられたことを告白する霊は、すべて神から出ているものであり、イエスを告白しない霊は、すべて神から出ているものではない。これは、反キリストの霊である。あなたがたは、それが来るとかねて聞いていたが、今やすでに世にきている」。このような奇妙な教えがどのようにして、キリスト教会に入り込んだのでしょうか。答えは単純です。初代教会の父祖たちの多くが高い水準の礼拝とは異教とキリスト教の教えを共に結合させることであると考えたためでした。

キリスト教と異教の結合

このような働き of 代表的人物がジェロームやアウグスティヌスでした。アウグスティヌスは10年間グノーシス派の一員でした。彼は人間の肉体は、神の律法に服従できないと考えました。こうして彼は原罪の教えを発展させることによって、自らのグノーシス派的概念をキリスト教の教えと結合させたのです。この見解によると、アダムは罪責と罪の汚れをその子孫に受け継がせ、そのため生まれてくる子は全て罪人であり、故に、神の助けをもってしても、神の律法に服従することは出来ないということになるのです。この教えが発展して、マリヤの無原罪懐妊といっ

た概念が出来上がったのです。またプロテスタント教会では、イエスが服従できたのは、奇跡的誕生によって、原罪を免れたからであるということになりました。



しかし、イエスはどのような肉体を実際に取りられたのでしょうか。ヘブル人への手紙 2 章の 14 節にはこのように書かれています。「このように、子たちは血と肉とに共にあずかっているのです、イエスもまた同様に、それらをそなえておられる」。イエスは私たちと同じ肉体を取られたのです。神に対する信仰によって、神の律法に完全に従うことが出来たのでした。イエスは私たちの模範であります。彼が築かれた品性を私たちも信仰によって与えられるのです。イエスの再臨に準備が出来ているには、神の律法に服従しなければいけません。黙示録によると、時の終わりにはイエスの再臨を迎えるひとつの小さな集団が興ると言われています。黙示録 14 章 12 節には、「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ちつづける聖徒の忍耐がある」とあります。反キリストの誤った見解を持ちながら、救いを期待することは出来ません。自ら聖書を研究し、信仰の導き手であり、完成者としてキリストを仰ぎ、信仰によってその戒めに従い、主の来臨に備えましょう。

紀元 312 年にローマの将軍コンスタンティンは、この異教化されたキリスト教に改宗したと宣言しました。戦場への途上、彼は天に十字架を見たと言いました。この十

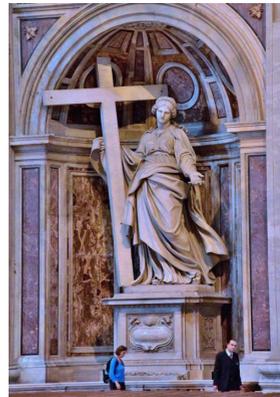


十字架に従い彼は戦闘に勝ち、イエス・キリストの為に勝利したと主張したのです。コンスタンティンが権力を手中に収めると、彼はアポロ神を崇拝していた

のにも係わらず、自分はクリスチャンであると宣言しました。その後には造られた貨幣にも彼の周囲には太陽神の象徴が描かれています。バチカンにあるこの絵にはコンスタンティンが当時のローマ司教に帝国の政治権力を表わしている法令書を手渡している様子が描かれています。



この出来事と関連しているかどうかは別にして、この頃からローマの司教が、全キリスト教会を支配するようになったことは確かです。ローマ・カトリック教会がローマの国に政治権力も持つようになりました。バチカンにあるこの絵にはカルバリの十字架が異教の神殿に於ける太陽神の像に取って代わっているのが分かります。その頃実際に何が起こったのでしょうか。貴族の目に、キリスト教を極めて権力的な





ものに見せつけるため、祭司たちは異教のカルトで用いられた衣服や飾りを身に着けるようになりました。そういうわけで、キリスト教徒は第一に、キリスト教のものではない祭司制度を取り入れ、これらの祭司らの衣服を取り入れました。今日私たちが見かける司祭たちの衣服は、まぎれもなく異教の祭司服なのです。

キリスト教に見る異教礼拝



教会はこのような異教の儀式を覆い隠すためには何でもやりましたが、これらの儀式をあるクリスチャン聖徒たちの名にすり替えて、続けさせるのを許していました。こうして教会は異教の神々を取り入れ、そ

れらにキリスト教徒の名を付けたのでした。今日キリスト教会に於いて、私たちが目にする像の多くは、もともと異教徒たちが伏し拝み、犠牲を捧げていた異教の神々であったのです。「教会の指導者たちは、初期の頃から悪の感染に抵抗し、悪魔崇拝に用いられていた器具や付属物を伝道に使用する為、キリスト教の力に託し、必要が起れば大衆の儀式や習慣を取り入れる真似をする、または是認する準備

が出来ていた」(キリスト教教義の発展 372 頁)。つまり、今日のキリスト教会の儀式はもともと異教のものであり、そのことは教会自身が認めているのです。

「前述の例は、より重要な太陽の祭りを挙げているだけだったが、これら異教の産物は現在でも同様の力を振っていることは明らかである。そしてキリスト教を表面に出しながら多くの場合、実際には異教の儀式を取り入れて行っている。



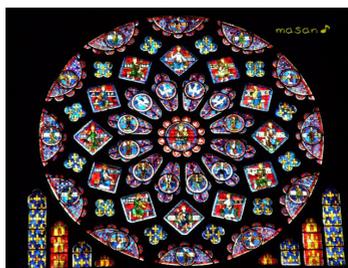
これらの儀式が始まった起源に注意が向けられない為、これら異教の趣旨は単に見失われているだけにすぎない。この異教の浸透はあまりにも大きい為、キリスト教はミトラ教(古代ペルシャの宗教)の宗派と化してしまった」とサムエル・デイ氏は解説しています。ミトラ教はローマでキリスト教が設立された当時、ローマの国教でありました。明らかに日曜礼拝やミサで聖餅を食べると言ったミトラ教の名残がその頃キリスト教に取り入れられたと言えるでしょう。ミトラ崇拜は占星術の一種であり、太陽神と自然の神々を拝む神秘宗教でありました。「要するに太陽礼拝は象徴的に、今日キリスト教会が祝っている大きな祭典の真髄そのものを信徒に語るのであり、これら異教の名残は、その神聖な儀式という媒体を通して、興味深いことに、それらの霊とは完全に対立するはずの習慣や信条と非常にうまく混ざり合っ

まったのである」(各時代の太陽崇拜 248 頁)。

ローマ教会内に見る性的シンボル



世の学者や歴史家たち、また教会の指導者らが自らローマのキリスト教は事実上キリスト教を装った異教の偶像礼拝であることを認めているのです。異教世界の象徴がキリスト教会に取り入れられ、連盟によって是認されたと主張しているのです。各時代の密教という本の中に「それでも、十字架そのものが男根崇拜の象徴の最も古いものであり、大聖堂の菱形の窓はヨーニ（「女陰」の意）の象徴が異教神秘の破壊の中で生き残ったことの証拠である。教会組織自体に性的シンボル、または男根崇拜が浸透している。キリスト教会から全ての男根の、または性的起源から来る象徴を取り除いたら何も残らない」とあります。今日キリスト教会を見てみると、床やアーチやドームばかりであり、それらは生々しい性的シンボルを拝む異教に他なりません。教会の尖塔や中庭などは全て性的シンボルを崇拜する概念を反映しているのです。



「原始キリスト教会の狂信者らが、異教をキリスト教化



しようと試みた時、異教の創始者らはキリスト教を異教化する為、ただならぬ力の入れようですそれに応えた。キリスト教は敗れ、異教が成功を収めた。異教の衰退と共に、異教の創始者らは、彼らの運動の土台を原始キリスト教という新しい乗り物に乗り換え、常に賢者の計り知れない所有物であった、永遠の真理を覆い隠すために、新しいカルトのシンボルを取り入れた」。こうしてキリスト教はまさしく当時異教の指導者であった者たちの希望となったのでした。今やキリスト教徒を名のる異教徒たちが主導権を握ったのでした。「世俗が信心深い様子をして教会内に入って来た。今や墮

落は急速に進んだ。異教は征服されたように見えながら勝利者となった。異教の精神が教会を支配した。その教義と礼典と迷信とがキリストの弟子であると公言する人々の信仰と礼拝に織り込まれた」(各時代の争闘上巻 44 ページ)。

異邦人の礼拝の危険についてパウロは警告しています。「人々が供える物は、悪霊ども、すなわち、神ならぬものに供えるのである。わたしは、あなたがたが悪霊の仲間

なることを望まない。主の杯と悪霊どもの杯とを、同時に飲むことはできない。主の食卓と悪霊どもの食卓とに、同時にあずかることはできない」(コリント人への第一の手紙 10:20, 21)。キリスト教が全くの悪魔崇拜となっ
てしまいました。異教世界の犠牲制度や礼拝を見廻してみると、この礼拝はサタンとその手下どもに捧げられているのが分かります。キリスト教が同じ礼拝形式を取り入れるということは、事実上同様の権威に服していることなのです。太陽崇拜と一般キリスト教を比較してみると、今日全く類似



していることが分かります。太陽の出生はタムズの誕生日である 12 月 25 日となっており、今日クリスマスと呼ばれています。6 月 24 日に行われた夏至の祭りは、今日聖ヨハネ祭と呼ばれていて、異教の女神となったセミラミスの被昇天は、今日聖母マリヤ被昇天の祝日となっています。聖母である女神が崇拜され、天の女王という称号が付けられました。そして今日、処女マリヤにも同じ称号が与えられています。女神に捧げられ、装飾された薄くて平たいパンには、T 型の十字が刻まれています。今日教会では熱い十字の丸いパンと呼ばれています。タムズの為になされた 40 日間の断

食と嘆きは、今日キリスト教会で四旬節と呼ばれているものです。イースターの祭りは今でもイースターと呼ばれていますが、もともとはタムズの復活を祝っていたものでした。聖週間になされた刻んだ像の行列は、今日イエスやマリヤやペテロ、またその他の聖徒たちを刻んだ像の行列となっています。寺院における、イシュタールやタムズの崇敬は、今日イエス、マリヤ、またその他の聖徒たちを刻んだ像の崇敬となっています。

霊魂不滅と地獄の信条は、何千年もの間異教徒に引き継がれてきました。煉獄の教理はギリシャ哲学で言う、浄化の概念から拝借したものでした。死者が生きている人に現れると言う信条もありました。11月に行われたこの祭りは、今日キリスト教でも霊魂の日として祀られています。それがハロウィンなのです。祭壇の前で線香を焚くという概念は異教からのものでした。チャント（詠唱歌）や反復の祈り、数珠じゆずは現在教会でロザリオと呼ばれています。十字架のシンボルはもともと太陽そしてサタンの象徴でありましたが、今日キリスト教会に於いて、礼拝の対象となっています。お守りは異教徒が霊を追い払う為、身に着けていたものでした。今日クリスチャンは十字架をお守りとして身に着けているのです。聖餅の周りのIHSは、イシスとホラス、セブを象徴しており、エジプトに於いて霊魂をなだめるために食べていました。現在教会で聖餐のパ





ンとなっています。頭の周囲にある太陽の輝きを描いた子供と母親の絵は、現在東方のカトリック教会に於いて、イコンと呼ばれています。幼児洗礼、滴礼などは全て異教からでした。口寄せ、死者に語りかけるという概念が神秘キリスト教や、今日のキリスト教会に於いては、奇跡のひとつとされています。主の第一日目である日曜日は、全ての文化に於いて太陽神を崇めるために守られていました。今日、キリスト教会もその日を遵守しています。

異教とカトリック教の共通点

異教に於いて最高位の神の名称であった、ポンティフェス・マキシムスという言葉が、現在ローマ法王の名として、キリスト教会に於いても用いられています。ヤヌスとシビルはかつて小アジアに於いて、天地の鍵を持つ者として崇められていましたが、現在ローマ法王は、同様の鍵を持っていると主張しています。王なる大





祭司が、王座に担がれて神々の宮殿へ行くという概念は、ローマ法王が、聖ペテロ寺院に行く時に携帯王座に担がれて行くのに変わっています。異教の王なる大祭司は、太陽神の生まれ変わり、天の神の代表者とされていました。法王は自らを神の代弁者であると主張しています。神々をなだめる為に捧げ物がなされていました。これらの概念

が教会に於いて難行苦行や免罪符という形で引き継がれました。古くから売春婦や女祭司の宿が存在していました。今日教会は修道院を設けてその概念を引き継いでいます。そして、太陽崇拝が行われた各時代を通じて、太陽神の敵が生贄・人身御供として捧げられました。宗教裁判に於いて、5000万人以上の人々が殺害されたと言われています。多くの生命が奪われたのでした。



ローマに於けるこのようなキリスト教の形をとったカルトと、ヒンズー教を比較してみると、ここでも多くの類似点が見

られます。ローマ教に於いて聖書は、一般信徒から遠のけられ、分かりにくい言葉使いで記されていました。そして、司祭だけが聖書を理解できると考えられていました。ヒンズー教に於いて、祭司だけがベーダ（インド最古の宗教文献）を理解できると考えられ、ベーダは一般民衆から遠のけられました。ロザリオ・数珠の使用はヒンズー教で見られます。贖罪の苦行の概念もヒンズー教にあります。死人の為に捧げる祈りもヒンズー教にあります。全聖徒の日に灯される蠟燭は、ヒンズーに於いてディマリの祭に見られます。キリス



ト教会で重んじられている聖徒の亡骸は、^{なきがら}2000年前ヒンズー教に於いて、礼拝の対象として重んじられていました。ローマ教もヒンズー同様、夜通し起

きて死体の番をします。死人、または墓の周りで、蠟燭を燃やすこともヒンズー教は行います。聖堂の灯はヒンズーの寺院でも、カトリック教会でも見られます。教会に於いて聖徒の前で灯される蠟燭は、ヒンズーで何千年もの間守られてきたものでした。ヨーロッパや今日カトリック世界で見られる宮参りの巡礼は、ヒンズーの世界でも同様に見られます。キリスト教会で棺の中にシュロの葉を聖なる葉として置くしきたりは、ヒンズー教に於いても聖なる草が同様の目的を果たしています。ローマ・カトリック教に於



いて、マドンナ、聖母とその幼児が天の女王、そして神の子として崇拝されています。ヒンズー教ではナンクリヤとリバ、女神であり天の女王、そしてその長男インカ、天の王が崇拝されていました。キリスト教の修道女と、ヒンズー教の尼僧を比較してみると、あらゆる点に於いて、酷似しているのが分かります。キリスト教はヒンズー教と同じなのでしょうか？ローマのキリスト教がヒンズー教なのであります。ローマのキリスト教は太陽崇拝であります。そして異教の儀式は、今日

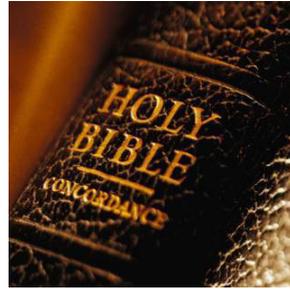
でも続けられているのです。大聖堂で行われる礼拝に行ってみると、様々な祝典を目の当たりにします。そこで行われている礼拝式は、まさしく古代シナルの平野で始まった、バビロン形式の礼拝なのです。

教会は、異教の偶像礼拝にどれほどはまり込んでしまっているのでしょうか。事実を知ったら、あなたはショックを受けられることでしょう。リチャード・ペインナイトという人の表わした、「性的シンボリズム」という本によると、南イタリアの教会では、18世紀になっても、聖コスモの偶像に捧げる為の、性的シンボルを教会に持って来るよう、信徒に勧めていたそうです。南フランスでは、性器の彫刻が人々に見えるよう教会のドアの上に置かれていたのが発



見されました。この卑猥な礼拝の最も驚くべき、ショッキングな部分は、南フランスに於けるプリアプスの礼拝、すなわち男性生殖器の神の礼拝でした。そこでは性の神が礼拝堂に聖徒の名で像として置かれ、若い女たちはその像に純潔を捧げさせられたのでした。

神は、私たちに警告を与えずに、放っておかれませんでした。救済の為、神は人に何を求められるかを、神は聖書の中ではっきりと示しておられるばかりでなく、真理を純粹に保つ為に直面する大いなる危険についても示しておられます。最後の使徒ヨハネは、パト



モス島へ島流しにされました。彼の伝道活動にピリオドが打たれたかのように見えたが、神はそこで数多くの幻をお与えになりました。これらの幻が時の終わりに至るまで、神の民が直面する歴史を預言していました。イエスが教会に歩み寄っておられること、彼がどれほど教会を愛し、見守っておられるかを、幻で示されました。イエスは天の大祭司であられ、民にご自分の義を提供し、勧告と戒めと警告を与えておられます。ヨハネはまた様々な形をし

た教会の敵についても、幻で示されました。彼はローマの異教体制を七つの頭を持つ龍として見せられました。また、海から昇って来る七つの頭と、十の角を持つ獣も見せられました。事実この獣は、バビロンの時代から地上を支配して来たあらゆる異教体制を組み合わせていた様々な象徴からなっていました。

異教ローマの崩壊後、登場した権力とは何でしょう。それはローマ教会でした。この大いなる獣とはまさしく、過去の異教の特徴を取り入れた、ローマ・カトリック教会なのです。黙示録 17 章では、教会が神に背を向け、この世の政治権力と結託した淫婦として表わされています。「この女の名は、大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべき者等との母であり、主はこの女と係わってはならない」と警告なされたのでした。



バビロンの教えと、「6 6 6」のシステムが教会中にはびこっていることを証明する方法は沢山あります。古代バビロンは今日、荒廃しきっています。メソポタミア地方は荒野と化してしまいました。バビロンとその宗教に臨んだ呪いを、私たちは見ることが出来ます。ヨハネの時代、古代のカルトはほとんど過去のものとなっていました。弱体化し死にかかっていました。これらの神秘宗教が息を吹き返し、勢力を取り戻すには、異教の偶像礼拝を保ちながら、キリスト教という新体制を乗っ取ることが是非とも必要で

した。大英博物館にあるメソポタミアからのこの巨大な境界石には、五つの太陽の象徴が描かれています。事実中東近辺で発見される全ての境界石には、太陽、月、星の神々のシンボルが描かれています。明らかにこれらのシンボルの意味合いは、今日でも変わっていません。しかし、一般民衆に伝えられる意味合いは、時代を通じて変化して行きました。



「6」という数字は、神、グノーシス、繁殖、幾何学、そして山羊の頭文字である「G」によって、また多くの異なる方法で表わすことができます。「S・O・V・U」はどれも蛇の象徴でした。「3・4・7・8・10」は宇宙パワーを代表する数字として用いられました。「↑」(矢)、「+(十字)、「十字の中の円」、「聖痕」(十字架にかけられたキリストの傷に似た傷跡)、また「1」は、どれも自然の性の神が持つ繁殖力を象徴していました。次の列は、巨大な七つの頭を持つ龍、大いなる「6 6 6」のパワーを象徴していました。そして次の列で、ヘブル語の「S(エス)」は三位一体を象徴する三又の^{ほこ}矛を意味していました。「☆ (ペンタグラム)」は自然の力を表わしていました。一方の角を上に向けるとそれは黄道帯の上の部屋を表わしました。下に向けると、黄道帯の下を部屋を表わしてしま

た。正三角形が二つ重なって、「六角の星形(☆)」になると、それは自然の繁殖力を象徴し、また魔術では悪の星となりました。



と信じられていたので、神聖視されていました。この神聖な金が異教の寺院建築に用いられ、神々の像にメッキされたのでした。教会が異教に取って代わって支配権を握った時、教会もまた金を取り入れました。今日大聖堂や

これらは皆同じものを象徴していました。オカルト（神秘教）の祭司等は、彼らの周囲や自然にみなぎる一神教的なある力を信じていましたが、彼らは民衆に迷信的恐怖を植え付ける為、多神教を説いていました。祭司等はこれら憐れな民衆の生活を様々な神話や、神々のシンボルでもって、がんじがらめにしたのでした。神々の象徴の中で、最高位にあったのが太陽でした。太陽は全ての生命と健康の源として表わされています。金は黄泉の国において太陽神を反映するもの





様々な教会を見てみると、金がいたるところに見られます。教会はまさに金の宝庫であります。像や建造物も金であります。カトリック教会は世界で他のどの機関よりも多くの金を所有しているのです。

カルバリを示してはいない十字架



古代人が目を細めて太陽を眺めてみると、瞼の中で太陽は十字の形に見えました。こうして「十字形」が最初の太陽の記号、あるいはシンボルとなりました。大英博物館にあるメソポタミア時代の境界石にもそれが見られます。紀元前 3000 年頃の円筒印章や異教世界で使用された貨幣にも世界中で十字形が見られました。この封印には円と十字形の結合が見られます。この男女の結合を表わすシンボルはアフリカで多産の象徴として取り入れられました。エジプトでは「アंक十字」が不死身のシンボルでした。エジ



プトのコプト文化においては、背教した教会がその教理の象徴として異教のシンボルを取り入れました。それが初めて教会に取り入れられた時、もともとカルバリの十字架との関連は全くありませんでした。異教の神の十字形はあらゆる形で教会に取り入れられました。そして今日、これらの十字形や様々な異教のシンボルは教会の祭壇、建築物にも見られます。今日、十字形は教会に於いて、礼拝の主要な対象となっています。お守りとして首にもかけられています。司祭たちはイニシエーション（秘伝の伝授、入団式）に於いて、十字の形をとって床に横たわります。

他には二重の十字形があります。古代バビロニアの太陽神シャマシュの象徴です。メソポタミアのいたるところで、それが象徴として用いられていました。このギリシャの貨幣にも描かれています。そしてそれがローマの聖ペテロ寺

院の床にも描かれています。この二重十字は教会のいたる所で見られます。

太陽神の象徴である車輪



他には太陽神の象徴として、車輪、または車輪の中の車輪があります。それはアポロの戦車やアッシリアの太陽神に描かれています。オシリスの目であるエジプトの神ハトホルは、

ちょうどインドのカルナラ

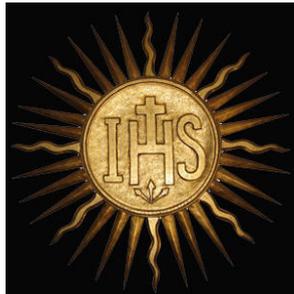
クにあるような車輪です。そこの寺院でもいたる所に車輪があります。この仏教の太陽を表わす車輪は、タイでも見つかっています。ペルシャの太陽車輪、ギリシャの太陽車輪、そしてローマ司祭の神酒杯にもローマ神の太陽車輪が描かれています。1963年テカルでこの神酒杯は発見されました。車輪の中に車輪があります。二重の十字架に気付かれると思います。真ん中には単



一の十字があり、それは世界最大の輪である、ちょうど聖ペテロ寺院にある車輪のような完全な形を留めた太陽の輪です。太陽の輪は今日、教会中至るところで見られます。天井にも、床にも。ここには輪を持っている司祭と、輪を

持っているマリヤの絵があります。

東洋には生命の輪というのがあります。仏教から来たものです。宇宙の三局面の力を表わしています。仏教の広告や彼らの作品に於いてそれが見られます。ロンドンにあるこの神道神社では、「6」が三つ合わさった形からなっている太陽の絵があります。神社からほんの少し歩くと、ウェストミンスター大聖堂があります。チャペルの床には同じ東洋から来た太陽の輪があります。「6」が三つ合わさっています。ソルあるいは太陽神は世界中で拝まれていました。ローマだけでなくギリシャも太陽の霊を象徴する顔の絵があります。ここギリシャの寺院ではアポロ神が祀られています。曲線と波線が男女の結合を表わしています。これと全く同じ象徴物がカトリックの祭壇に見られます。スカンジナビアとイエズス会チャペルの講壇にも見られます。ブルゴ寺院では祭壇上で太陽がイエスの後ろから見つめている絵があります。また、ローマの聖ペテロ寺院



の天井では、太陽の顔が天井から見下ろしています。他の教会ではドームの頂上と床に太陽が描かれています。今日キリスト教会に於いて、太陽はいたる所に見られます。



この心臓からは性のシンボルを表わす光が出ています。かつて、異教徒は心臓を拝みました。肉体から心臓をえぐり取って、それが動いている間に太陽に捧げたのでした。心臓を拝む様子は、世界中いたるところの彫像に見られます。これはケツアルコアトル（古代メキシコの神話中に見られる翼を持つ蛇神）の像で、その胸の空間にはちょうどイエス・キリストの彫像のように、生きた心臓だけが描かれています。このような心臓崇拜が、キリスト教礼拝で重要な一端を担うこととなったのでした。この窓には雲の上に

ある太陽として描かれたり、または七つの剣が刺さっているマリヤの心臓として描かれています。これは七つの星の神々を礼拝していた古代の宗教を反映しています。エジプトで太陽は赤いディスクとしても描かれていました。これは「ラ」という神です。ここではオシリスが太陽を掲げています。ホルス頭上にも描かれています。これらの赤い円



は、教会の床や祭壇にも同様に見られます。この墓に入っている王様の頭上には、エジプトの三位一体神のシンボルである二匹の蛇が、赤い太陽の周囲にいます。ラ神とオマン、そしてオシリスの象徴です。ウェストミンスター大聖堂のチャペルには、赤いディスクの周囲に絡み合っている二匹の蛇が見られます。

わします。エジプトばかりでなく、スカンジナビアでも見られます。明らかにこのディスクは神格を示すため、神々の頭の後ろに置かれています。東洋のいたる所にもあり、それが聖ペテロの頭の後ろにもあります。かつてオリオレスと呼ばれたこれ



教会はなぜこれらのものを取り入れたのでしょうか。金のディスクもまた、太陽を表

らのディスク



は、現在ヘイロまたは後光と呼ばれています。それが太陽礼拝の名残りとして教会に溢れています。クリシュナの周囲にある光り輝くディスクは、明らかに後光であり、このヒンズー神の周囲にある輪は、まさしく後光であります。そして、マリヤの頭の後ろにも同じような後光が射しているのです。他



にはニンブスという後光があります。それは生殖、繁殖力を拝む秘教から来ています。女性性器の崇拜であります。古代人はこのシンボルの中に神々を置いて、それらが繁殖力、または生命を表わしました。そして、教会は同じシンボルの中に、聖徒たち、マリヤ、またキリストを置いたのです。

Part II

異教に共通する「666」



宇宙を支配する太陽の象徴のひとつに、巨大な球体がありました。メソポタミアの境界石に王様が球体を持っている様子が描かれています。またインドではヒンズーの神が太陽を手を持っている様子があります。エジプトではタマオシ黄金虫が天空で天球を支えているものとして崇拜されました。球体を持つというこの思想は、ギリシャの礼拝にも見られます。黄道帯の12の部屋をめぐる戦いでは、ヘラクレスが球体を手を持っています。ペルシャのミトラも黄道帯の支配者を表わす神として同じ球体を持っています。エジプトのイシスも同様です。ローマのマキシムス、またはシーザーも天球を手を持っています。教会はこの「666」のシンボルを取り入れ、自ら祀っている神格、すなわちマリヤやイエスの手に持たせたのでした。この像はカトリコスまたはアトラスが宇宙を担っているものです。ローマ・カトリックの祭壇にそれが反映されています。また、バチカンにある三重冠の天辺には大きな天球が置かれていて、



巨大な球体が聖ペテロ寺院の頂上に据えられているのです。南米で見つかったこの石を見ると、これらの古代人さえ、太陽を拝んでいたことが分かります。

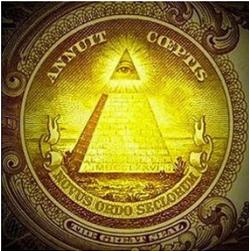


この石には太陽のもう一つのシンボルである、三角形を見ることが出来ます。遙か遠く離れた北アイルランドで、古代アイルランドの異教徒たちが、巨大な一枚岩の上に、太陽のシンボルとして、三角形を刻みました。アメリカインディアン達は神格を象徴するものとしてテラコッタ硬貨（赤土焼き）に三角形を刻みました。エジプトに於いても、三角形は太陽神の象徴でありました。全ての神秘的、神のパワーを表わすため、ピタゴラスは三角形のシンボルを用いました。異教の地ではどこでも三角形が見られます。サンノゼッシュの博物館にも同じシンボルがあります。教会を見渡すと、彼らがこの異教に源を置くシンボルを、キリスト教の神のシンボルとして取り入れたことが分かります。正三角形は「6 6 6」の神を表わします。教会とは全く縁のないものです。

他には目を拝むという風習がありました。それは神の目を表わしていました。それはピラミッドの蓋石がいせきに見られます。ここでは、蓋石の中心部にオシリスの目を表わす円と点が見られます。エジプトの異教徒はオシリスを非常に恐れて拝んでいました。彼らは魔除けの為、目をポケットに入れて持ち歩いていました。ローマでもこのような形態の



礼拝が取り入れられ、この異教ローマの墓の上には、神のシンボルとして、巨大な目が刻まれました。このフリーメイソンの徽章では、神の目が正三角形の中に置かれているという概念を表わしています。



三角形内のこの目は、大聖堂の巨大なドームから見下ろしているというのです。またイタリア・トリノにあるこの懺悔箱、フランスの教会のこの講壇、どこに行っても教会は、目を用いています。

他には、重なり合った三角形のシンボルがあります。それは自然の繁殖の法則を表わし、中心部には神の全てを見通すと言われる目があります。その周囲には黄道帯の36区が描かれています。その数を全て足すと「666」になります。アリストアー・クラウリがこの六角の星形をデザインしました。その中心には、数字の「6」と太陽が見られます。これらのシンボルが同様にキリスト教会でも見られるのです。ここカトリックの祭壇上には、サタンのシンボルがあります。英国にある大聖堂の床にも、ロンドンにあるウエストミンスター大聖堂の天井にも、どこの教会へ行っても、オカルトから由来している



これらのシンボルが見られるのです。サンフランシスコ大学にあるイエズス会のチャペルにも同じシンボルがあります。

さて、この六角の星形は中心に六つの辺を持つ物体を形作っています。花に受粉した蜂が蜜蝋の中で六角形を形作ったのは、蜂が神の象徴だからと考えられていました。蜂は教会中の芸術作品に、しばしば見られます。五角の星形、ペンタグラムは宇宙の力を象徴していました。上向きであろうと、下向きであろうと、それはサタン礼拝で用いられていました。ところが、ここカトリックの祭壇や床にも同じシンボルが見られるのです。

帆立貝は宇宙、または宇宙のパワーの象徴でした。それは多くの場で見られます。海の神ネプチューンの頭の上に、またアトラスやカトリコスも担いでいます。ローマにあるこの墓の上には、宇宙を象徴する帆立貝があり、階段は天国への階段を象徴しています。この帆立貝の中でビーナスが生まれ、この帆立貝の中で彼女が裸になるところを描いています。このギリシャの貨幣にも帆立貝が描かれています。ここでは異教のビーナスが多産のシンボルである開いた帆立貝の中にいます。教会は性的シンボルをコスミックフォース（宇宙の力）のシンボルとして取り入れました。今日教会のいたる所でそれが見られます。聖ペテロ寺院の中にも帆立貝



によって洗礼を受けるイエスの絵があります。この聖堂には帆立貝が、イエスの兄弟を表わす、聖ヤコブとして描かれており、これらの貝柱が聖水盤として使用されているのです。ウエストミンスター大聖堂には、教会の床下に葬式を行う為のチャペルがあります。よく注意してみると、神格のシンボルが置かれているべきアーチの頂上に巨大な金の帆立貝が置かれているのです。



ローマのバチカンには教会の最も著名なシンボルのひとつに、占星術パワーのシンボルである巨大な帆立貝があります。本来キリスト教徒は何の係わりあいのないものであります。イエズス会の教会の床には、帆立貝に繋がった太陽が描かれています。太陽が海の中に沈むと、それが魚の神になると古代人は考えました。インドには沈む太陽を意味する魚の神がいます。海の神ネプチューンも半魚人です。エジプトでは女神イシスが死んだ夫の亡骸を探す為、魚に変身したと言われています。アッシリアでは神が魚になるという概念の下、魚が礼拝の対象となりました。異教寺院の前に置かれたこの洗盤に

祭司の彫刻が見られます。これらの祭司らは興味深い服装をしています。彼らは頭に魚を被っているのです。レアーデという考古学者は、それを魚の司教冠と呼びました。カ



ナンで発見されたレリーフは、ダゴンの祭司たちが太陽の魚神ダゴンを拜むシンボルとして、魚の帽子を被っている様子が描かれています。小アジアでは、シビルのミステリーの中に、彼女がこの魚冠を被っている様子

を描きました。確かに、異教世界のあちらこちらで、祭司たちがこの魚冠を被っている様子が見られますが、それが教会にも取り入れられました。今日でもなお、彼らは魚が口を開いているようなその魚冠を被っているのです。

他に太陽を表わすシンボルに三重の冠があります。それは天と地と地獄を治める太陽の象徴でありました。異教世界の芸術品にそれが反映されています。ここでは頭に三重冠を被ったメソポタミアの王と、同じく三重冠を被ったインドの神クリシュナが見られ、背教したヘブルの宗教ガバラは、彼らの大いなる太陽神「6 6 6」が三重冠を被っている

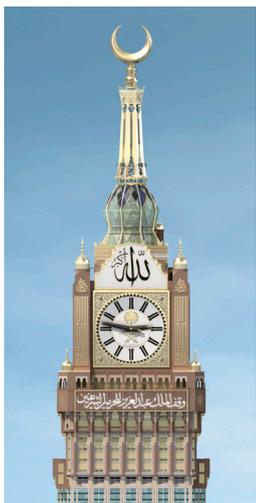


姿を描いています。教会も法王が地上における神であることを異教徒に示すために、この三重冠・ティアラを取り入れたのでした。今日でもバチカンには、ある特定の儀式に法王が被る為の豪華な三重冠があるのです。

真ん中に横たわっている三日月形は月ではありません。これは女性の性的パワーを表わしています。そしてこれが



天の子宮として拝まれていたのです。この円筒形の紋章には、天空の神として描かれています。バチカン博物館にあるビーナス像の頭



には、三日月形の角のようなものがあります。三日月形の崇拜

は牝牛の角を拝む風習から来たものでした。雄牛の母である牝牛は、生命の源と考えられていました。ローマの月の女神の頭上にも三日月があります。ミトラを表わしているこの女神の頭の上にも角があります。死の世界の女神であるバビロンのリリス（バビロニア神話—荒野に住んで子供を襲う女性の夜の鬼神）が三日月形の中に

立っています。教会でもあの性的シンボルの中に立っている女神を見ることが出来ます。それは月を表わしている形ではありません。かつての異教偶像崇拜と全く同じものなのです。それは女性の生殖パワーのシンボルなのです。





スカンジナビアにはトナカイの角の真ん中に立っているマリヤ像があります。当時、その地方には牛がいなかったので、彼女の力のシンボルとして、トナカイの角の間に

それを置いたのです。最も驚くべきマリヤの描写を、南フランスのリオンに見ることが出来ます。その大聖堂で頭に角を生やし、祭司の胸当てを身に着けたマリヤ像があります。マリヤが神と人との間を執り成す仲保者であることを表わしているのです。これほどの外れなものが他にありませんか。私たちの仲保者はただひとりであり、天国に至る道は、イエス・キリストを通してのみであることを、聖書は明言しております。



太陽を抱くマリア像

生殖器を崇拜する概念、また聖母崇拜が異教徒を虜にし、ローマは人々の官能に訴えるこの方式を取り入れたのでした。シストルムと呼ばれたこの楽器は、異教女祭司のダンスに於いて使用されました。エジプトのカルトに於いて天の女神イシスが、そのシストルムを持っています。イシスがこう述べています。「われイシスは、いにしえの昔から

存在し、これからも永遠に存在する者である。死すべき人間がかつてわがベールを剥いだことはない。われは太陽という子を産んだ」。イシスの子はホルスと呼ばれています。このイシスとホルスの絵には、彼女が後光の真ん中に立っており、その周囲には黄道帯が見られます。彼女の子は太陽



神です。パチカンへ行くと、巨大なマドンナの象徴が聖ペテロ寺院の中に見られ、彼女は赤ん坊を腕に抱えています。キリスト教の描いたマドンナ像の赤ん坊もまた、太陽なのです。



母と子が神であるというこの寓話的概念は、エジプトにも、インドにも、東洋にも見られます。日本も中国もそれぞれ独自のマドンナ、聖母と、子の象徴を持っていました。イシスの概念はローマ帝国のいたる所で見られました。教会に於いては、この概念が、マリヤと赤ん坊イエスとして取り入れられました。今日の教会で、マリヤとイエスの像を見ると、キリスト教に先立つ古代の偶像礼拝の反映であることが分かります。子供だけの像も異教に見られますが、教会にも幼子イエスの像が、それ自体神として拝まれているのです。

メソポタミア時代のこの境界石には、太陽神シャマツシュ（アッカド人の太陽神）が刻まれています。シャマツ

シュは天の子宮である三日月から生まれたと言われていま
す。紀元前 2500 年頃の円筒印章にそれが見られます。三
日月の中に太陽が、または女性の中に男性が、という概念
を表わしています。このミトラの祭壇や、このエジプトの
宝石には、三日月形の中に置かれた太陽のディスクが見ら
れます。インドでも三日月の中に入ったディスクをいたる
所で見ることが出来ます。星印・アステリスクは、ギリシャ
に於いて太陽のシンボルでした。ここでは三つの三日月の
中に、三つのアステリスクが見られます。



このメソポタミアのレリーフ
には、三日月の中に太陽神が描か
れているのがお分かりでしょ
うか。ローマ・カトリックの聖体顕
示台も、三日月の中にディスクが
あります。聖体顕示台の多くは



三日月の中に聖餐のパンが置かれ
ます。事実私たちが写真に収めたほとんどの
聖体顕示台には、聖餅を入れる為の三
日月形がありました。それは男性と女
性の性的結合を表わしており、こうし
て生殖の法則が礼拝の対象となってい
ながら、人々はそのことに気が付いて
いないのです。

礼拝堂のこの小さな扉の上には、秘跡（ sacrament ）
の道具が置かれています。杯の周りに麦と葡萄があること
に注目してください。これは自然の神を崇拝するもので



す。その神の名はディオニュソスという酒の神、バッカスとも言います。ローマに於いて自然の神々は、しばしば葡萄やシュロの葉を持った、山羊のような人間として描かれました。太陽神礼拝には葡萄酒を飲む儀式もあります。それは神の血であると考えられていました。メキシコでは太陽神への供え物として、メースという香料が作られ、人々がそれを食べました。

エジプトに於いては神への献身の表明として、人々が聖餅を食べました。またギリシャでは生殖の法則を祀り、神々の聖餐に於いてこれらの聖餅が食されました。ギリシャのアクロポリスでは、大祭司が三人の剛健な男たちに雄牛を持って来させました。大祭司は聖餅を焼き、それを祭壇の上に置きました。雄牛にそれを食べさせてから、雄牛を屠り、それから皮を剥ぎました。人々はおのおの雄牛の肉と血を食するよう促されました。それから皮に穀物を詰め込み、人々は再び雄牛の身体を裂いて、その穀物を食べました。それは彼らの体内に繁殖力を取り入れることを表わしていました。

カトリックに見る異教の礼拝形態

同様の礼拝形態は、ペルシャの神ミトラ崇拜にも見られました。それがかつてローマの国教でもありました。ロー



マの修行僧らは、聖餅（聖餐のパン）を取って食べました。彼らはイニシエーションと儀式に於いて、以前からあった異教の聖餐を真似たのでした。その食事には神が招かれ、その聖体

が兵士らに配られました。おそらくミトラ崇拜は、今日のローマ・カトリック教に最も近いものと言えるでしょう。驚くべきことに、ヨーロッパの大寺院の地下には、異教の寺院の遺跡があり、そこに於いて初期のクリスチャンたちは、司祭や指導者らの勧めで、礼拝していたのでした。

聖ペテロ寺院にはミサで使われている壮大な燭台がいくつも見られます。蝋燭立てを一本一本注意深く見ると、それぞれそこには顔が描かれています。その顔はミサで祀られている



神を表わしていると推測することが出来ます。ところがこれらの顔をよく見ると、人と山羊の交ざり合った生き物であることが分かります。それはまさしくサタンのシンボルなのです。ミサに参加する人々の多くはそのことを知りません。彼らは何千年もの昔から行われていたサタンを祀る儀式を引き継いだにすぎません。



サンフランシスコにある聖マリア教会には、聖体顕示台に聖餅が展示されていて、扉の傍には六つのパンが置かれています。葡萄は酒の神バッカスの血と考えられていて、それを飲んで酔った者は神の霊を宿したと考えられました。これは神秘宗教の重要なイニシエーションのひとつで、今日ローマ・カトリック教会でも、実際に神の血を飲む儀式として、重要な役割を果たしているのです。

聖書には「人の肉を食べず、またその血を飲まなければ、あなたがたの内に生命はない」とありますが、現在、教会では司祭だけに葡萄酒を飲むことが許されています。バチカンでは、シャリオリの上に奇妙な顔のものが見られます。山羊の角を持ち、笑みを浮かべた醜い顔の男です。ここにも自然の繁殖力を祀った礼拝が表わされているのです。



神はどうして、各時代に於いてこのような有様をご覧になり、なおもこのような異端あずかに与る人々を愛されたのでしょうか。神の愛は無限で、人が混乱しているのをご存じで、彼らの目を覚ましたいと望んでおられるのです。遙か昔、神を除いては最も優れた存

在が天で反乱を引き起こしました。「黎明の子、明けの明星ルシファーよ、あなたは天から落ちてしまった。…あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』」（イザヤ 14:12 – 15）。彼は自ら被造物でありながら、創造主になりたいと考えました。彼は神のシンボルを自ら取り入れ、天から追放されたのでした。ヨハネは大いなる龍が神の教会を破壊しようとしているのを見ました。



昔、異教偶像崇拜に於いて、蛇のシンボルはバビロンからパレスチナ、ペルシャに至るまで、太陽を拝む者のシンボルでした。後に蛇は神のシンボルとなりました。アジアに於いて

は、自然のエネルギーを象徴していました。インドでは神の様々な局面を表わし、エジプトでは混沌をあわらし、生命はその混沌から生まれたと考えました。それは聖なる蛇、ウリヤを表わしました。ネフェルチチの帽子に聖なる蛇ウリヤが見られます。翼を持ったケルビムがファラオを守り、ツタンカーメンの傍には翼を持った二匹の蛇がいました。それは魂の門、または死後の霊そのものを表わしました。それはすなわち、太陽の霊の象徴でありました。墓の上にある蛇の放線状の身体は魂の生まれ変わりを表わしました。エジプト北部にあるハトシェプスト（古代エジ



プト第 18 王朝の第 5 代女王 1495 - 1475BC) 寺院にも、礼拝堂に至るまで、身体をねじられた翼を持つ蛇があり、神と交わる為の媒介とされていました。中米のメキシコや南米では、蛇がケツアルクアトル、またはクウクウカーンという名で原住民によって拝まれ、どちらも太陽を表わす翼を持った蛇でありました。チェチェンイツアでは、大寺院に頂上まで続く階段があり、その入り口には翼を持つ二匹の蛇が置かれていました。

ギリシャに於いて、蛇の神はアスキュラピウス呼ばれました。アスキュラピウスには、癒しの力があると考えられ、ギリシャ帝国中で拝まれました。アポロ神も戦争と知恵の女神アテナでさえ、蛇と同等にされていました。ローマに於いて蛇は癒しと死後の魂を天に運ぶ霊力のシンボルとなりました。スカンジナビアでは蛇のシンボルが全ての中心でした。船は蛇や龍の形に造られ、人々が礼拝した国教会には、いたる所に蛇の彫刻がありました。



この国教会には蛇の形をした格子作りがあり、両側には大きな大きな翼が広がっていました。礼拝堂に入るにはその扉を通らなければなりませんでした。チャイナタウンには、仕事場に入るのに、蛇のハンドルを掴まねばなりません。またタイでは

寺の入り口の傍に、巨大な蛇が置かれている場所が、数多く見られます。この寺院には大きな羽のある龍の鷲や、翼のある龍のライオンや、龍の山羊のハンドル、極めつけは龍そのものの形をしたものもあります。扉を開けるにはまず、これらのハンドルを押さなくてはなりません。ところが奥殿から戻る時に、これは異教の寺ではなく、サンフランシスコにある聖マリヤ教会であることに気付かれることでしょう。中庭には六つの十字模様が三列に置かれています。礼拝堂の祭壇に登る階段は六段です。何故これら異教のシンボルが未だに教会で用いられているのでしょうか。教会にこれらのシンボルをずーっと用いて来た為、他になす術を知らないのであります。

蛇は長年の間教会に於いても見られました。墓や床の上に、あるいは、ウエストミンスター大聖堂では、イエスの頭の上に置かれています。一か所で最も多くの龍の形をした蛇が見られたのは、バチカンでした。ここでは龍が墓の上から、床から、また数々の芸術品の中から人々を見



つめています。天蓋でさえ、蛇の形をした古代の柱を模倣したものです。これらの巨大な螺旋状の柱は、杖に巻きついた蛇を表わしていました。蛇は善と悪と両方のエネルギーを象徴していました。そしてここでは二匹の蛇が宇宙の卵を持っています。その卵はベルニーニの天蓋にも見られます。異教に於いてロープは蛇の象徴として

用いられ、それは法王の冠にも見られます。バチカンにあるベルニーニの大広間では、教会が巨大な金の龍によって象徴されています。

聖ペテロ寺院の床下には、自らを「6」と称した法王の冠があり、それには六匹の蛇が見られます。稲妻は蛇のパワーのシンボルでありました。古代の神々は稲妻を起すことが出来ると考えられていました。古代ギルガメシュまでさかのぼると、この稲妻がメソポタミアのこれら異教の神々の手の中にありました。祭司も王もこれら神通力のある杖を持ち歩きました。大英博物館にあるこのシリア王は、雷の轟きと稲妻を表わすシンボルを手に持っています。オシリスは蛇を掴んでおり、ツタンカーメンでさえ、蛇の杖を持っていました。このエトルリアの神はその手に蛇を持っています。またギリシャの宗教に於いてさえ、アテナ（知恵と戦いの女神）が手に司教杖を持っているのが見られます。アクロポリスからその杖が、蛇であったことは明らかです。マヤの宗教に於いては、儀式中祭司たちはこれら



蛇の杖を持ちました。また日本に於いても、神格を表わすこれらの杖を、高位聖職者らが持っていました。スカンジナビアでも祭司たちが同様に、蛇の杖を持っていました。このエトルリア人は螺旋状の司教杖を手に持っています。メソポタミアでも祭司たちが同様の杖を持ちました。

ベルリンではシナル地方からの杖の柄を撮影することが出来ました。その先には蛇がおり、明らかに教会が主張しているような羊飼いの杖とは、何の関係もないものです。高位聖職者たちは、今日でもその杖を持っています。ちょうど昔の古代魔術師たちのように、多くの場合、杖には蛇の頭が付いています。ある者は象牙を彫刻したもので、時にはそれをより神聖なものにするために、聖徒の骨で彫刻したのもあるのです。東方のカトリック世界に於いては、二つの蛇の頭が付いた杖も見られます。これはパトモス島で発見されたものです。あるものは、今日法王の王座にあるこの杖のように、生殖力を表わす花のデザインがなされています。司祭や他の高位聖職者たちも、自分たちが自然のエネルギーフォースを支配しているシンボルとして、これらの杖を持ちます。彼らの主張に関係なく、これには元々の意味があり、聖ニコラスでさえ、蛇の杖を持っています。しかもイエズス会師の杖には、二つの頭が付いています。

他には、アダト神が持っているような、三又の稲妻があります。稲妻は様々な異なる形で見られます。ここではネプチューンが巨大なピッチフォークとして持っています。ネプチューンのピッチフォークは、ミトラやヒンズー神、あるいはギリシャの祭壇でも見られます。ここではギリシャの神が、カトリックの墓で三又の矛を持っています。ここではイエスの頭から三又の矛が出ており、聖ペテロ寺院ではこの十字架の角から矛が出てきているのです。三又の矛の別の形は、紀元





前 3000 年から存在した、円筒印章にある祝福の手であります。ヒンズーの神にもそれがあります。また仏教も宇宙の神聖なシンボルを取り入れました。これらエジプトの祭司たちは、手をその肩に組み、宇宙のフォースに対抗することで自らを守りました。この



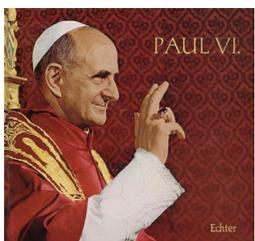
スパルタ神は、このローマの牧神のような手の形をしています。また、ローマのシーザーは、「6 6 6」のシンボルであるこのような手の形を作っています。ロンドンでは同様の



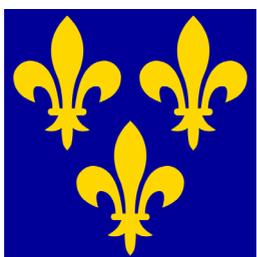
手の形をした太陽神アポロが見つかっています。人々を角と尻尾の生えたピッチフォークを持つ悪魔から守るため、指はポケットに入れるか首のところに置きました。ゼウス

神の祭壇には、この聖なる手が宇宙のフォースのシンボルとして置かれました。これら奉納された手は、ヨーロッパの大きな博物館に於いても見られ、異教礼拝の名残りを示しています。

リチャード・ペインナイトは、自分の性的シンボルのコレクションを大英博物館に寄贈しましたが、中でも重要なのがこの宇宙を象徴する手です。男性と女性の指が一緒に



挙げられ、生殖を表わす親指の先には、松ぼっくりが付いています。その周りにはエネルギーを表わす蛇、多産のシンボルである山羊の頭、三つの聖餅が置かれている祭壇があります。その下には聖母マドンナと子供がいます。手の甲にはあらゆる占星術の神々のシンボルがあります。これらの手はイニシエーションを受ける人達に伸べられました。これの手からエネルギーがほとぼしり、彼らに宇宙的生まれ変わりを与えると考えられていました。これらの手がキリスト教会でも見られるというのは、驚くべきことです。これは神への冒瀆です。それは黄道帯を支配する「666」の神を表わしているのです。そして今日でも、司祭や法王たちが悪魔のサインを送り続けているのです。



他には男性生殖器のシンボルがあります。メソポタミアの祭壇、あるいはこのバビロニアの魔神の頭に、今日私たちがフラドリと呼んでいる紋章があります。イシスの頭やバックカスのシンボルにもフラドリがあります。自然の性的フォースを表わしています。ところが今日ローマ教会にも見られるのです。



稲妻を掴む動作は、ゼウスが火を投げる動作として表現されることもあります。イエズス会の教会でも同様に稲妻を掴む様子が描かれています。このミトラ教の稲妻は矢で表わされています。矢は世界的に自然のフォースである性的エネルギーのシンボルであります。ここではクリシュナが矢を手で持ち、アスキュラピウス寺院では、ギリシャの医者が自然治癒力のシンボルとして、矢を手を持っています。このメソポタミアからの境界石は、矢じりを神自身として示しています。ローマ人たちは

鉄で矢じりを作り、それで生贄を屠って太陽神に捧げたのでした。イエスはその悪魔的シンボルでもって、十字架に付けられました。ところが自らも実質的に異教である教会はそのシンボルを取り入れ、今日ではそれが教会に於いて、神格のシンボルとして用いられ、祭壇や床で拝まれているのです。



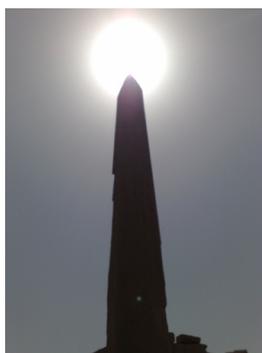
ここでは三つの矢がコップを支えています。イエズス会の教会には、自らの王を加えた蛇と共に、女性子宮のシンボルに矢が刺さっているのが見られます。このカトリックの聖体顕示台には聖餅から発するエネルギーを象徴するものとして、矢が刺さっています。

古代人たちは神格のシンボルとして、常緑樹を拝みました。メソポタミアでは生命の生まれ変わりのシンボルとして、シュロの木を拝んでいました。その象徴はギリシャやローマの宗教にも取り入れられ、現在ではそれがローマ・カトリック教会の床や祭壇、墓などに見られるのです。



この生まれ変わりを表わすものとして、他には松ぼっくりのシンボルがあります。この松ぼっくりはメソポタミアの中のレリーフで、魔神たちが手に持っています。エジプトではオシリスを象徴しています。ここではオシリスが、先が松ぼっくりの形をした杖を持っています。カイロ博物館では、ツタンカーメンが自らの支配力のシンボルとして、松ぼっくりの枝を持ち、このヒンズーの神は手に松ぼっくりを持っています。ケツアルコアトルも一方に常緑樹を、もう一方に松ぼっくりを持っています。このギリシャの多産の女神も同様です。松ぼっくりは、ローマ人によって取り入れられ、このミトラ教の祭壇には、正三角形の真ん中に松ぼっくりが、また墓にも同様のものが見られます。バッカスは男性生殖器のシンボルである、松ぼっくりの枝を手にも持っており、これらのレリーフでも、ディオニソスが松ぼっくりの杖を持っている様子が描かれています。パンテオンからは巨大な松ぼっくりを手を持っている、巨大なディオニソスの像が見つかり、ローマに置かれています。初期のキリスト教史に於いて、生命の象徴として、松ぼっくりが取り

入れられ、今では教会のいたる所にそれが見られます。この古代の性的シンボルは、教会の芸術品にだけでなく、最も大きなものは、バチカンの宮殿にあります。それは世界一大きなもので、二階建ての高さになります。古代異教の神格のように、法王も松ぼっくりの杖を持っており、世界中どこへ行くにもその杖を持ち歩きます。



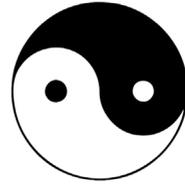
雄牛は太陽の生命を生み出すパワーのシンボルでした。ローマに於いて生殖器は、プリアプスという名の下で、エジプトにおいてはミンという名の下で、崇拜されました。生殖器崇拜は、オシリスの男根崇拜に見られます。それはエジプトの寺院の前に置かれ、太陽が昇ると、その影が寺院の中に入りました。地球という子宮に生命を注ぎ込む太陽の力を象徴していました。イスラム教ではこの概念と、これらの塔が取り入れられ、今日のバチカンでも、これらのオシリスのシンボルのひとつが、聖ペトロ寺院前の中庭に置かれました。異教世界にあるものと同じ状態で置かれたのでした。異教寺院の柱は、天と地の結合を表わしています。同様に生殖のシンボルでもありました。これがバチカンにあるベルニーニの柱廊で再現されています。尖塔はいろいろな教会で見られますが、それらは古代

の生殖器崇拜であるプリアプスの再現なのです。



東洋に於いてエネルギーは、陰と陽で表わされています。バッカスの頭もそれを表わし

ています。二つの頭、一つの神の二面性などです。このマヤの神は、頭に白と黒の羽毛を付けています。善と悪、陽極と陰極、男と女のシンボルです。またこのヒンズー



経典にもあります。このローマの床は、同様に神の二面性を反映しています。フリーメイソンもそれを取り入れ、彼らがイニシエーションを行うところに、白黒の床を用いています。神は善であり、悪であることを表わしているのです。サンノゼ市にあるバラ十字会の寺院でも、この白黒の床の上で、イニシエーションが行われます。



古代バビロンの寺の中庭にも、交互に置かれた白と黒のタイルがあり、そこで善と悪の両面を持つ神を拜んでいました。ヨーロッパの比較的古い大聖堂の多くにも、この白と黒の床が用いられているのです。

闇と神秘、悪の神をサトルヌスと言いました。バビロンの最初の神はニムロデで、彼は黒人でした。彼の名はエチオプス、クシの子とも言いました。エジプトで同じ伝説を



持つ、オシリスも黒人でした。異教世界では多くの神々が黒人でありま
す。ヒンズー教のビシュヌも、最高
神格のリシもそうです。バチカンで
は、ペテロが黒人になっています。
古代バビロニアの創立者が黒人で
あったと言っているように、現代の
カトリック教会も創立者ペテロが黒
人であったと言っています。

異教偶像礼拝に於いて、足に接吻するという行為は、神を礼拝することの象徴でした。ヒンズー教の信者は、彼らの霊的師匠の足に接吻し、これらの絵や彫刻からフォースやエネルギーが流れ出ると考えられていました。ヒンズーの寺で人々が足に接吻しているのをみました。そこからエネルギーを受けるのだと説明を受けました。ところが聖ペテロ寺院に於いても、人々が列をなして、ペテロ像の足に接吻しているではありませんか。このような行為でさえ、ローマ・カトリックは取り入れてしまったのです。



鍵を持つ行為も、元々異教のものでした。光を開き、闇の世界を閉じることを表わしていました。今日法王は自らその力を持っていると主張しています。4世紀に異教の神である、ヤヌスとシビルが夢で法王に現れ、その鍵を渡したと言われ

ています。法王が自ら持っていると言主張するこの無限の力は、地獄の権威をも彼に与えてしまうのです。これは人々を恐怖と不安に縛り付ける為に、取り入れられた教えです。元々キリスト教にはない教えです。法王は意のままに、地獄の縄目から解放する力を持つと考えられていますが、異教偶像礼拝の制度を見廻すと、東洋からバビロンに至るまで、どの文化にも永遠の灼熱地獄という概念が存在するのです。カトリック独自の思想ではありません。



異教徒はしばしば、死者から離れた霊を鳥に例えました。天空を舞う鷲は彼らにとって恰好のシンボルで、墓などに刻まれています。大いなる不死鳥ーフェニックスは昇って来る太陽を表わし、二つの頭を持つ不死鳥は、神の究極の局面である、善と悪を表わします。羽のある霊は、死者を離れて天に昇る人の靈魂を表わし、教会でもこれらの鳥が、いたるところで見られます。しばしば背中に聖書に乗せている不死鳥も描かれています。これら教会の教えとは、縁もゆかりもない鳥があちらこちらに置かれているのです。ペリカンは何を意味するものでしょう。マンレーホールの著書



によると、秘密結社などの神秘的教で、その子らに食物を与える太陽を表わしているそうです。インドに於いて孔雀は太陽神、または神々の生みの親を象徴しています。ある時にはサタンの象徴となります。ここウエストミンスター大聖堂にも孔雀がいます。



古代人たちは死者を拝みました。彼らは生ける神を知らなかったのです。彼らの神々がかつてこの地上で生き、天に昇って行ったと考えました。ローマのパンテオン（万神殿）は、占星術の神々を拝むために、人々が集まった所でした。これらの神々は世界で最大の異教古物のコレクションを有する、バチカンへと移行しました。この死者を拝む概念は、聖人崇拜として

教会に取り入れられたのでした。エジプトには365もの神々がありました。各々は年内の一日を占めていました。ローマ・カトリックにも、1年365日中、どの日にも異なる聖人が定められているのをご存じでしたか？ 聖人たちはそれぞれ、ある異教の神々を反映しているのです。教会に入ってみると、いたる所に死者の棺が置かれているのが分かります。まさに教会自体が、死者の世界と化しています。バルゴス大聖堂にあるこの巨大な祭壇は壮大で、高さは4階の建物にも匹敵しますが、其処ら中に聖人たちが祀られて

いて、これは死者の礼拝以外の何ものでもありません。法王たちの死体には防腐処理が施されて、三重の棺に納められ、聖ペテロ寺院の床下に保管されます。人々はそこにやって来て死者を祀り上げ、ロザリオの祈りを捧げ、棺に接吻するのです。比較的小さな教会でも床下に死者を納める場所があります。



紀元前 2500 年頃のこの円筒印章で、祭司が何か小さなボールのようなものを持っているのにお気づきでしょうか？ バビロンやメソポタミアのレリーフでは、祭司や守り神が数珠を手にかけています。数珠玉はバビロンに於て礼拝の一部を占めていました。これらの数珠はバビロニア



の雄牛崇拝から取られました。またファラオの数珠は、彼と共に墓に納められました。数珠は祈りに用いられ、エジプトでも礼拝の重要な部分を占めていました。ヒンズー教も仏教も皆、祈りに数珠を用います。イスラ

ム教世界でも祈祷用の数珠がアラーの礼拝に用いられました。教会で目にする数珠玉は、まさしく異教に源を置くものなのです。キリスト教徒には縁もゆかりもないものです。

ローソクは靈魂不滅を象徴しています。火は太陽を象徴



しています。異教の寺院では常に火を絶やさず灯し続けます。ところが今日、カトリックの祭壇を見ると、そこでは異教が完璧に再現されています。何も見ることも聞くこともできない聖徒たちの祭壇に、ローソクを灯す為に、人々は多額のお金を費やすのです。



ミサや他の儀式の間、祭壇の周りで香が焚かれます。何世紀も前から東洋のヒンズー教でも線香が焚かれてきました。しかし、カトリック教で最も奇妙なのは、人間司祭の崇敬であります。「司祭の威厳と務め」という本の中に、聖アルフォンス・リグオーリが、司祭の教理的見解と立場を述べている所があります。「神は司祭の言葉に従って、彼らが呼べばどここの祭壇にでも降りてくる。そしてその後は、彼らが敵であろうと彼らの意のままになる。場所から場所へ好きなだけ、神を動かせる。望むならば、神殿の中に閉じ込めておくことも、祭壇上に晒しておくことも、教会の外に持ち出すこともできる。選ぶならば、彼の肉を食べ、他の人にそれを与えることも出来る。彼らの力は何と大きいことだろう。民衆はキリストの犠牲を受ける為、祭司の下に来なければ



ならない。司祭の権力は、すなわち、神の権力である。パンの実体変化（聖餐のパンとぶどう酒がキリストの肉と血に変わること）は、天地創造と同じ力を要するからである。こうして、司祭は創造主を創造する者と呼ばれるに相応しい者となるのである」。



全ての聖餅のうちにイエスが再創造され、犠牲が再現されるという思想は冒瀆であります。「司祭は全ての作られた権威のうち、最上の者であり、また無限の威厳と驚くべき奇跡、偉大で広大、かつ無限、天よりも高く上げられた威厳、彼は神にのみ劣るものである」。この立場に於いて司祭は、古代異教の祭司らと全く同じ立場を取って

いるのです。決してキリストは、地上でこのような祭司制を起こされませんでした。罪人を赦免することに於いて、司祭は聖霊の務めそのものと、魂の清めをなす、その務めの故、人々は清めか許しを司祭から受けられると感じて、俗人の下に罪を告白しに集まっているのは、最も悲しむべきことのひとつであります。イ





ノセント三世はこう書きました。「彼らの務めの高貴を見ると、司祭達は、まさしく神々である」と。人はどうしてそこまで盲目になれるのでしょうか。今日見る、あのようなカトリッ

クの形態は、ありとあらゆる異教偶像礼拝から出て来たと考えざるを得ません。



祭司が神の礼拝の為に選ばれたように、古代の寺院では、女たちがベスタの処女、あるいは女祭司として選別されました。今日、女祭司の形を引き継いでいるのが、修道女であります。

開かれた修道院の尼僧たちは、多くの素晴らしい働きをしているように見えます。ところが、閉じられた修道院では、彼女たちは司祭らにこき使われているのです。そこで彼女らは苦勞を強いられ、そこで死んで逝くのです。彼女たちは二度と再び、家族や友人たちに会うことが出来ません。このような修道院内で、実際に何が行われているのか、知る術はありませんが、いつの日か、神がその閉じられた扉を開き、真理が示されることでしょう。

法王の称号は足すと「666」

塔を身に着けることは、天と地の支配権を象徴しました。大いなる塔の建造者であるポントマキシムス、そしてこれ



が法王の名前なのです。バチカン中で建物の入り口や墓にそれが見られます。法王の称号は、足すと数字の「666」になるよう選ばれています。神の代弁者という意味の、「ヴィカリウス・フィリィ・デイ (Vicarius Filii Dei)」 そうです。ラテン数字として足すと、「666」になります。この神聖な扉を見ると、各法王が「6 6 6」の神であったことが分かります。



この扉には各法王の兜が刻まれています。それぞれが「6 6 6」を表わします。三つのブイ、三つのフラドリ、六つの六角星が、何故兜に描かれているのでしょうか。ラテン語を話す人を意味する、「ラ



ティノス (LATEINOS)」という言葉が、ギリシャ語では、足して「666」になります。その男は、聖ペテロ寺院に於いて、自らを神として運ばせます。ここでは法王が、天辺を黄道帯に囲まれた玉座に座しています。聖職者の長という意味の、「デュ

クス・クレリ (DUX CLERI)」も、法廷の代弁者を意味する、「ルドヴィクス (LUDOVICUS)」も、足すと「666」になります。ゼウスは黄道帯の円を統括したと言われていいます。アトラスは黄道帯を担っていました。どちらも6 6 6

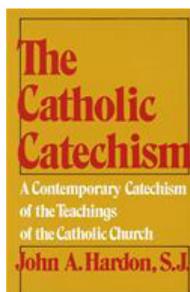


の神のシンボルです。1527年に、ローマで出版された出版物に、法王クレメンテスが、黄道帯に座している絵があります。宇宙の一部を悪魔が動かし、他の一部を天使が動か

しています。星座表の本には、法王が「666」の神、黄道帯の支配者、善と悪の神として描かれています。イタリアの国教会という意味の、「イタリカ・エクレシア (ITALIKA EKKLESIA)」という語も、足すと「666」になります。その教会の中心が今日ローマにある、聖ペテロ寺院です。その上に登って柱廊を見下ろすと、そこは太陽神のシンボルだらけなのが分かります。ラテン王国を意味する、「エ・ラティネバシレア (H E LATINEBASILEIA)」という語も、足して行くと、「666」になります。その王国は、この1825年の貨幣で、周りに環のある地球に座っている女として象徴されています。教会自体が、「666」の神なのであります。ローマ・カトリックの神とは何者なのでしょう。一見、イエスのように見えますが、それは偽者なのであります。サンフランシスコにあるイエズス会教会の祭壇には、ミサの神を表わしている六つのオカルト的太陽のシンボルがあります。ローマのバチカンでは、ケースの下にある聖体顕示台に小さく、「S F S」と書かれています。象形文字では三つとも「6」を表わします。人々はこの組織にひれ伏し、その頭である人間にひれ伏すとき、実は、「666」の神を拜んでいることに気付いていないのです。「サタンを表わすギリシャ語 (TEITAN)」は足すと、「666」になります。

カトリックの組織が黙示録の獣であることは明らかです。その印とは何でしょう。いにしえから神は、ご自身の権威の印を人類にお与えになりました。その印は、安息日の内にあります。安息日—サーバス (Sabbath) という名の内に、父の印という言葉がかくされていることを発見した学者もいます。「SAB」は「父」、「ATH」は「印」を表わし、中間の「B」は「宿られる場所」を意味します。聖書を研究すると第七日安息日は神が創造主であり、私たちを清める贖い主、私たちの霊的安息、私たちは神の民であるという印であります。そして他の律法と共に、その律法を守ることは、私たちが神の全ての戒めを守っていることの印なのです。私たちは、イエスの死後も安息日を守るべきであることを、イエス御自身がお示しになりました。イエスの死は神の律法を変えませんでした。マタイ 24 章 20 節をお読みになって下さい。その日がどのようにして変えられたのでしょうか。神の聖なる印がどのようにして、ミトラ教の礼拝日に変えられてしまったのでしょうか。

カトリック教会がもつ権威



カトリック教理の問答という本を引用します。

問：何故、我々は土曜日ではなく、日曜日を遵守するか。

答：我々は土曜日の代わりに、日曜日を遵守する。何故なら、カトリック教

会とラオデキアの公会議が聖日を土曜日から日曜日に移したからである。

問：教会に祭りや聖日を定める権威があることを、どのように証明するのか。

答：安息日を日曜日に変えたという事実そのものによってである。プロテスタントもそれに従った。

問：教会に祭りや規則を定める権威があることを、他にどうやって証明するのか。

答：教会にそのような権威がなければ、それをすることも出来なかったし、あらゆる現代の宗教家たちが同意することもなかったであろう。日曜遵守を第七日にとって代わらせることも出来なかったのである。第七日安息日を変えることは、聖書の権威に基づいているものではないからである。イエス・キリストの権威により、安息日を主の復活記念日である日曜日に移したのは、カトリック教会であった。こうして日曜日を遵守するプロテスタントは、彼ら自身の主張に係わらず、カトリック教会の権威に敬意を表しているのである。

コンスタンティン I 世は、異教とキリスト教を結合させようという自らの努力で最初の日曜休業令を作りました。教会はその運動と同様のものに関する数々の法律をひとつにまとめ、礼拝日を土曜日から日曜日に移しました。「聖書を創世記から黙示録まで読んでも、日曜聖日を承認している箇所は、どこにも見当たらない。聖書はカトリックが決

して認めない土曜日の宗教的遵守を要求したのである」ギボンズ枢機卿。

「わたしは日曜日を聖く守るべきであると、聖書だけから証明できる人には、1000ドル進呈すると何度も繰り返し申し出た。聖書にそのような掟はない。それは、聖カトリック教会の掟だけである。聖書は『安息日を覚えて、これを聖とせよ』と述べる。カトリック教会は、『否』と言う。『わが神からの権威により、わたしは安息日を廃止し、週の第一日目を聖く守ることを命ずる』。見よ、全ての文明社会は聖カトリック教会の命令に敬意を払って従い、伏し拝んでいる」T. エンライト、1884年。

再び、「わたしは繰り返し、わたしが守るべき日は日曜日であることを、聖書から証明した人には誰にでも、1000ドル進呈すると申し出たが、誰もお金を取りに来た人はいない。安息日を第七日土曜日から週の第一日目である日曜日に変えたのは、聖カトリック教会であった」と、彼は9年後の1893年に言っています。

「このことから、神の戒めを我々に解釈、解説するにあたり、教会の権威がどれほど偉大なものかが分かる。全キリスト教会も世界的にそれを実践することで、教会の権威を認めている。聖書を唯一信仰の基準としていると主張する、これらの分派でさえ、聖書が命ずる第七日ではなく、カトリック教会の伝統であり、教えだったから、我々が聖く守っている第一日目を守ってい



るのである」ヘンリー・ギブソン。

易しい教理問答。「理性と良識があれば、次のどちらかを選ぶしかない。プロテスタントとして土曜日を聖く守るか、それともカトリックとして、日曜日を聖く守るか、妥協は不可能である」ジェームス・ギブソン枢機卿、1893年12月23日。

ローマ・カトリックの挑戦相手

1893年に、ローマはプロテスタント界に挑戦状を送りました。と言うのも、プロテスタントが米国で、日曜遵守令を施行しようと求めたからでした。カトリック教会は速やかに行動し、彼らのやっていることは、ローマ・カトリック教会の権威の印に敬意を払っていることであると指摘しました。当時のカトリック印刷物からの抜粋を読んで見ましょう。

「アドベンチストだけが、第七日から第一日への日の変更について、なんの根拠も与えていない教師として、聖書に従っているキリスト教会である。彼らはそれ故に、セブンスデー・アドベンチストと名乗っているし、彼らの主要な原則は、神御自身の明確な命令に従い、神の特別な礼拝日として、土曜日を聖別することで成り立っている。旧新約聖書に何度も繰り返されており、今日に至るまで、何千年間もイスラエルの子らが文字通り従い、地上におられた神の御子の教えと実践によって支持されてきたことに、ローマは挑戦する」ローマの挑戦 2 ページ。



「プロテスタントにとって、自らを贖うにはまだ遅すぎない。彼らはそれをするだろうか。実際に書かれた言葉、聖書だけを全的権威、標準とする

だろうか。それともなおも弁解の余地のないものを持ちつづけて、カトリック教会の権威に従うという矛盾的、かつ自滅的教理と習わしにしがみつき、カトリックの権威の印を持ち続けるのだろうか。彼らは聖書に沿った第七日目である主の安息日を守るだろうか。それともカトリックの伝統に従って、日曜日を守るだろうか」ローマの挑戦 31 ページ。

日曜遵守こそ獣の刻印



日曜遵守は、まさしく獣の刻印であります。神はこの問題に関して、全てのクリスチャンをテストします。いつの

日か日曜日が法律化されて、全ての人が神の印か、太陽神の印かのどちらかに、立たなければならなくなることでしょう。今日、世界中にメッセージが伝えられねばなりません。そのメッセージとは「キリスト教は倒れた、彼女は異教の教えを受け入れ、黙示録 17 章にある、あの像や淫婦、それは奥義であって、大いなるバビロン、淫婦どもと地の憎むべき者らとの母とひとつになった」と言うもので

す。神はこの背信的体制から人々を呼び出しておられるのです。黙示録 18 章にはこの世界に対する、イエスの警告が記されています。

「この後、わたしは、もうひとりの御使が、大いなる権威を持って、天から降りて来るのを見た（御使とは、使命者、また使命を意味します）。地は彼の栄光によって明るくされた（全地がこのメッセージを受けることでしょう）。彼は力強い声で叫んで言った、『倒れた、大いなるバビロン（すなわち混乱）は倒れた。そして、それは悪魔の住む所（キリスト教会は悪魔の住む所となりました。）、あらゆる汚れた霊の巣くつ、また、あらゆる汚れた憎むべき鳥の巣くつとなった（異教から来ているあらゆる死人崇拜の教えは、今日の背信したキリスト教会内に見られるのです）。全ての国民は、彼女の姦淫に対する激しい怒りのぶどう酒を飲み（それは彼女の偽の教えであり）、地の王たちは彼女と姦淫を行い（地の政治権力



す。神はこの背信的体制から人々を呼び出しておられるのです。黙示録 18 章にはこの世界に対する、イエスの警告が記されています。



は彼女と不謹慎な関係を持っているのです)、地上の商人たちは、彼女の極度のぜいたくによって富を得たからである(キリスト教世界は、世界経済に於て不当な利益を得ています)』。わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、『わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積み積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる』。

選ぶのは一人一人

皆さん、恵みの期間は終わろうとしています。イエスはまもなく来られます。来られる前に、彼は彼の律法を守っている忠実な民をお集めになることでしょうか。あなたはその民に加わりますか？ あなたが聖書を手に取り、イエス・キリストとの深い関係へと、導かれることを祈ります。

